図録解説「京阪電鉄」

平成 31 年(2019)は、京阪電鉄と琵琶湖鉄道汽船が昭和 4 年(1929)に合併し、現在の路線となってから、90 年になります。京阪電鉄は明治 43 年(1910)に開業した道です。当初は大阪天満と京都五条を結ぶ鉄道でしたが、県内の既存路線を持つ会社との合併により、最終的には京阪神から琵琶湖への遊覧客をも取り込む幅広い路線となりました。

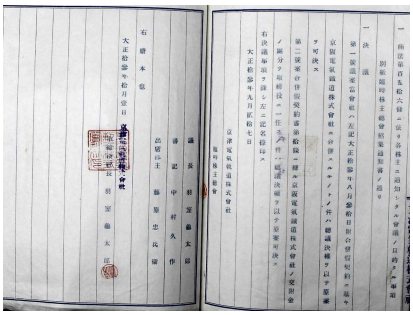
今回は、京阪電鉄がどのようにして琵琶湖への道を開いていったのか見ていきます。

大津の私鉄黎明期

明治末期から大正初期にかけては、地方都市間の主な交通手段である私設鉄道が整備されていった時期でした。当時、官設の東海道線の大津京都間は大津の馬場駅から伏見を経由して京都駅へと続いていました。しかし市街地間の浜大津から京都の繁華街(三条迄)へ出ることは大変不便でした。そこで旧東海道に沿って大津と京都を直結する鉄道敷設計画が立案されていきます。

いくつかの私設鉄道計画【明に 26(48)】がいずれも挫折に終わる中、地元大津において具体化した京津電気軌道(以下「京津電車」という。)は会社の設立まで至ります。その設立過程を振り返ると、まず明治 37 年、大津市長村田虎次郎と大津商業会議所との間で計画が発案され、翌年、軌道敷設の出願がなされます【明と 79 (3) 】。ところが同時期に京都電鉄と近畿電鉄からも同一の区間に対して軌道敷設の出願がされたため、三社競願の形となりました。内務大臣はこの願書をいずれも却下し、三社合同の敷設を勧告します。最終的に京都電鉄が京津電車に合流することになり、明治 40 年 (1907) 京津電車に特許状と命令書が付与されました。そして明治 43 (1910) 年に創立総会で初代社長に奥繁三郎が選任され【大と 29 (17) 】、京津電車は正式に発足します【明と 82 (21) 】。

その後、京津電車は京阪電鉄、京都電鉄と業務上の関係を深め、大正 2 年 (1913) からは三社共通連絡乗車券を発売します。さらに大正 4 年 (1915) 、京阪電鉄は鴨川線を開通して三条まで延伸すると、京津電車との合併を模索するようになりました。そして大正 14 年 (1925) 、京津電車は解散し、従来の軌道線路が京阪電鉄京津線となることを条件に、合併は成立します【大ぬ 158 (16) 】。こうして京津電車との合併を実現し、大津札の辻までの路線となった京阪電鉄は、更に大正 14 年 5 月に浜大津まで延伸することにより、琵琶湖の遊覧へと結びつきます。



「京津電気軌道臨時株主総会決議録」

【大ぬ 158 (16)】

また一方、大津においては明治 44 年 (1911) に大津電車軌道が創業します。この大津電車軌道は、京津電車に次いで大津に開業した私鉄で、明治政府の経済政策にも深く関わっていた元越前藩士由利公正らによって

設立された会社でした【明と 81（24）】。明治 40 年（1907）9 月には石山－坂本間の鉄道敷設免許を取得、明治 44 年（1911）1 月には創立総会を開催して社長に磯野良吉、常務取締役に薮田信吉を選任しています。多額の工費を省くため、当時めずらしかった鉄道院線（後の国鉄）との共用複線営業（現在の浜大津～膳所間）を行うなど、湖南の陸上交通機関として重要な機能を担っていました。

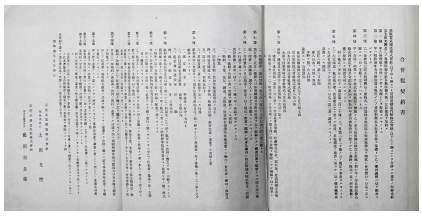
京阪の湖上進出

ところで、明治中期から大正にかけての湖上交通は、主に湖南汽船・太湖汽船の二社によって競われていました。しかしこれを揺るがすきっかけとなったのが、大正 10 年（1921）に大津－堅田間の営業を開始した江若鉄道の設立です。これによって湖南汽船・太湖汽船の二社によってバランスよく住み分けができていた規定航路に影響が生じだしました。

そこで湖南汽船は、大正 15 年（1926）に総株式の約 80 パーセントを京阪電鉄に譲渡して、その連携を強化します。

一方、経営不振に陥った太湖汽船は、大津電車軌道との合併を模索します。そして大津電車軌道と太湖汽船が昭和 2 年（1927）1 月 21 日合併を果たし【大と 50 合本 2（2）】、新会社である琵琶湖鉄道汽船を設立します。また近江八幡－八日市間の路線を経営していた湖南鉄道もこの合併に参加します。しかし、合併後も新会社の経営状況は必ずしも好転したとは言えませんでした。

そこで湖南汽船を仲介にして、琵琶湖鉄道汽船と京阪電鉄の両社は合併交渉に乗り出します。京阪電鉄の主眼は、団体遊覧客の利便を図り湖上交通の主導権を自社のものとすること、つまり琵琶湖鉄道汽船の保有する主要観光路線を掌握し、琵琶湖全体の航路を独占化することにありました。交渉の結果、鉄道部門は京阪電鉄に合併し、琵琶湖鉄道汽船の汽船部は分割し京阪電鉄が 150 万円で買収したうえで、仲介を担った傘下の湖南汽船と合併、その社名を再度由緒ある「太湖汽船」の名称をもって復活させることになりました（その後、昭和 26 年 2 月に名称を琵琶湖汽船株式会社と変更し、現在にまで至っています）。



「京阪電鉄、琵琶湖鉄道汽船合併仮契約書」
【大と 41 合本 3（2）】

そして昭和 3 年（1928）9 月 4 日に合併仮契約書を調印【大と 41 合本 3（2）】、翌 4 年（1929）4 月 11 日に正式合併が実施されます。同時に、京津線浜大津駅を起点に浜大津－京都間に加え京都－石山間、京都－坂本間の両路線も、直通運転を開始しました。

おわりに

京阪電鉄は二度の大きな合併を実現し、大阪方面からの琵琶湖遊覧客を取り込むことになりました。その過程は、滋賀県内の私設鉄道が発展を遂げる歴史とも重なるものでした。

こうして琵琶湖に至る路線をつないだ京阪電鉄は、現在に至るまで湖都大津だけではなく関西と湖都を結ぶ市民の鉄道として、親しまれています。